

ユスプ・ハス・ハジプ『幸福を与える智慧』の哲学 ：自然・国家・倫理

ムフタル, アブドゥラフマン

<https://hdl.handle.net/2324/2236327>

出版情報：九州大学, 2018, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

1. 研究の課題

本論文の目指すところは、ウイグル民族の古典『幸福を与える智慧(KUTADGHILIG)』(1069/70)の哲学を探究することによって、国家に関する中央アジア哲学思想の根本精神が何であったかを思い起こすことにある。民族にはその固有の生命があり、精神があり、思想がある。ウイグル民族もまた、思惟を抱く民族の一つとして、善や幸福、あるいは国家といった哲学の根本問題を考え続けてきた。国家論と言っても、それは、単に国家や政治に関する理論を論じるものではなく、個人ではなく人々が「共に」「善く」「生きる」ことの意味を問うものであり、人倫的ないし社会的な視点から幸福を問う哲学として、根本的には、道徳論または法論を指し示している。したがって、本論文は、『幸福を与える智慧』を、人間にとっての「善い場所」を探究する哲学・倫理学の探究の試みとして『幸福を与える智慧』を読解しようとする試みである。

ユスブ・ハス・ハジプの著作『幸福を与える智慧』は、そうした人間的な営みである哲学の試みとして、ウイグル民族精神の哲学的思索の輝かしい結晶であり、現代でもなお、幸福を問おうとする際には必ず遡及し、新たに考察しようとする際には必ず依拠すべき古典的な著作とすることができる。この意味で、およそ約千年の長い月日を経た現代世界に生きるウイグル民族にとって、『幸福を与える智慧』は民族がそこから再び出発すべきところの故郷であり続けている。幸福という哲学の根本を考える源泉として、『幸福を与える智慧』を読み解くこと、これが本研究の課題である。

2. 研究の方法

本論文は、その研究方法として、『幸福を与える智慧』を、テキストに使われている字句や表現を字義的に解釈するような、言語学的ないし文献学的方法は採らない。また、新しい作品を歴史の中で理解しようとする歴史学的、あるいは文芸的な解釈を目指すものでもない。むしろ、それが体現しているところの当のもの、つまり、その根本精神である幸福をめぐる哲学的思索の内実を探究することを課題とする。

『幸福を与える智慧』は、超人間的な「智慧」を永遠不変の真理として守り続けるような、何らかの宗教的聖典といった「真理の書」ではなく、いつの時代の、どのような人間でも、同じ問題に答えを得ようとして考える時に、絶えず呼び戻され、問い直されるべき、探究の指針を与えてくれる「真理探究の書」である。そのため、本研究もまた、人間の幸福を問う「探究者」として、ユスブ・ハス・ハジプの哲学思想を単に頑なに守り続けるのではなく、事柄の真理を問う者として、著者や著作に対してもまた批判的精神をもって対峙しようとするものである。したがって本論文では、ハジプの先人哲学者ファーラービー(870-950)や、ハジプの解釈者や批判者をも援用して、真理の探究に向けた議論を展開することを優先する。特に、ファーラービーの思想的影響を綿密に検討することは、本研究の大きな独自性を成すものである。

しかし、他のものとの比較や内容の評価に先立って、まず要求されるのは、『幸福を与える智慧』の語る哲学思想をあるがままに受け取ることである。そうした研究を通じて、「幸福」とは何か、そして、幸福を実現する「最善国家」とは何か、といった根本問題を考える議論の場を探し出さなければならない。

3. 論文の構成

本研究は『幸福を与える智慧』を「自然」「国家」「倫理」という三層の概念の関連において捉える。11世紀という時代に生きたユスブ・ハス・ハジブの哲学は、その自然哲学思想においても、国家思想においても、倫理思想においても、その前世紀にあたる10世紀の偉大な先人ファーラービーの哲学思想の全人格的な影響を抜きにしてはありえなかった。およそ150歳の年齢差のある二人に直接的な交流が為されたという事実はない。しかし、その哲学の根本精神において真の人格的継承が為されているということは、本研究にとって決定的な重要性を持つ。そのため、本論文は、それぞれ三節から成る三つの章、併せて全九節からなる構成を設け、それぞれの章の中間の節、つまり、第2節、第5節、第8節を、偉大な先人であるファーラービー哲学思想における「自然」「国家」「倫理」の哲学論究に充てている。

ファーラービーもウイグル哲学の根本精神を担う哲学者である。しかし、ユスブ・ハス・ハジブ『幸福を与える智慧』においてこそ、国家論をめぐるウイグル民族の哲学的な伝統の道が新たに切り拓かれるのである。その過程を解明するのが本研究の論旨である。

4. 研究の成果

『幸福を与える智慧』の研究は世界的に数多くなされているが、その大半は文芸批評といったものであり、道徳を教える教訓的文学作品として読まれることが通例である。あるいはまた、中央アジアに対する異文化地域からの思想的影響を指摘する際の実例として言及される程度に留まっている。

本研究は、『幸福を与える智慧』の根本思想を、「幸福」と「国家」とが本質的に結びついた「幸福国家」論という哲学思想のうちに捉える。「幸福」の問題は普遍的な哲学の主題であるが、幸福国家論においては、あるべき国家が幸福の観点から問い直されることになる。したがって、政治哲学のテーマである最善国家（あるべき国家）への問いが、倫理学の中心問題である、人間はいかに生きるべきか（あるべき人間）という問いと密接に関係してくる。本研究が最終的に解明しようとするのは、智慧と知識に基づく国家（幸福国家）が、最善の生き方（最高に善い生はまた最高に幸福な生でもある）と根本的な相関関係を持っているということである。あるべき国家への問いはまた、人は何を目指して生きるべきか（この世界をいかに歩むべきか）という問いともなるのである。

本研究の主眼は、『幸福を与える智慧』を世界の一地域の、単なる文芸作品の一つとしてではなく、ウイグルの哲学精神の結実として捉えることにある。